

【1】国譲り神話

出雲神話は国譲り神話といわれています。また、**生駒神話**も国譲り神話といえます。

出雲神話は「**大国主命おおくにぬしのみことの国譲り神話**」※、生駒神話は「**饒速日命ニギハヤヒノミコトの国譲り神話**」です。

※大国主命の国譲り神話のあらすじ↓

<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%97%A5%E8%AC%9E7%A5%9E%B3%A9%B1#:E8.91.A6.E5.9E.9F.E4.B8.AD.E6.B4.A5.E5.9B.BD.E5.D9.B3.E5.AE.9A.EF.BC.88.E5.9B.BD.E8.AD.E2.E3.82.8A.EF.BC.89>

国譲り神話は、せっかく大切につくった自分の国を戦うことなく奪いに来た者に譲り渡すという、世界に類を見ない「**戦うことを否定する神話**」です。なぜ、こんな神話が生まれたのでしょうか。それは、元来日本人は、「**なにより命を大切にし知恵により争いを解決せんとする、戦いを忌避する精神**」をもつ民族であるからといえます。この精神は、縄文・弥生時代に培われたと考えられます。

さて、**大国主命**は、天照大神あまてらすおほかみの指図で出雲の国を奪いに来た神と戦うことなく（つまり、殺し殺されるという戦いは忌避して）国を譲りました。しかし、①その後、**国を奪い取られた側の大国主命は、出雲には巨大な出雲大社が建造されて祀られ、また、全国では約 7000 もの神社で祀られ人々の崇拝を受けましたが**、逆に、国を譲られた側（天照大神）の影はありません（天照大神を祀る神社は、ずっとあとになって、しかも出雲ではなくから遠く離れた伊勢に建てられました）。②また、天照大神は天孫（天照大神の孫）の瓊々杵尊ニギノミコトを地上の国を治めさせるために降臨させた（天孫降臨）場所は、譲られたはずの出雲ではなく出雲から遠く離れた日向ひむか（南九州）でした。これらのことから、大国主命は一旦国を譲ったと見せかけて、**知恵を働かせて**、国を奪い取った側より精神的優位にたつことで国を奪い取った者の力を失わせその意図を粉碎して彼らを追い出したか傘下に治めたと考えられます。以上が「大国主命の国譲り神話」のあらすじと含意です。

また、**饒速日命**は、日向から東進して生駒を根元とする大和の国を奪いに来た磐余彦尊イワレヒコノミコト（瓊々杵尊のひ孫）と戦うことなく（つまり、殺し殺されるという戦いは忌避して）国を譲りました。そして磐余彦尊は一旦は即位して神武天皇となり、「始馭天下之天皇はつくにしらすめらみこと（初めて国を治めた天皇）」との称号を持ちました。しかし、①その後、各地に**国を奪い取られた側の饒速日命を祀る神社は多く建造されて饒速日命は崇拝されましたが**、国を譲られた側の磐余彦尊（神武天皇）を祀る神社は建造されませんでした（神武天皇を祀る橿原神宮が建造されたのは、なんと明治 23 年になってからでした）。②しかも、神武天皇のあと、欠史八代（日本書紀や古事記に名前だけが記され業績は記されていない天皇が八代続いたこと）が長く続き、10 代目になって、**再び「始馭天下之天皇はつくにしらすめらみこと（初めて国を治めた天皇の意）」との称号を持つ天皇（崇神天皇）が即位しました**（この天皇と神武天皇・饒速日命との関係は不明）。③また、饒速日命により「空見そらみつやまとの国」と名づけられていた大和の国の名を、神武天皇は国見（自分が治める地域を凝視すること）して「あきつしま（秋津洲）」としたことになっています（日本書紀にはそう記されていますが、古事記には記述なし）が、その後も大和の国は「空見つやまとの国」と呼ばれており、23 代目の雄略天皇が虻アブにかまれたときに蜻蛉あきつ（トンボ）が飛んできてその虻を食べ去ったことを機に、大和の国は「あきつしま（蜻蛉島／阿岐豆志麻あきづしまく古代ではつとづの区別なし）」と呼ばれることになりました。これらのことから、饒速日命は一旦国を譲ったと見せかけて、**知恵を働かせて**、国を奪い取った側より精神的優位にたつことで国を奪い取った者の力を失わせその意図を粉碎して、帰るところがない彼らを傘下に治めたと考えられます（帰るところがあれば彼らは帰国させられたでしょう）。以上が「饒速日命の国譲り神話」のあらすじと含意です。

なお、饒速日命と共に国づくりをした**長髓彦ナガスネヒコ**は六代目の大国主命（大国主とは「大いなる国の主あるじ」という称号で、大国主命は 1 人ではない。今日の日本において総理大臣が 1 人ではないように）であるという説があり<※1>、その説に従えば「饒速日命の国譲り神話」は「大国主命（＝長髓彦）の国譲り神話」といってもよいでしょう。また、「饒速日命の国譲り神話」は、「出雲（大国主命）の国譲り神話」と相似しており、その原像であったという説もあります<※2>。実は、饒速日命の国譲り神話は、長髓彦を主人公とする長髓彦神話（長髓彦物語）の続きであり、**生駒の神話は長髓彦神話と、それに続く饒速日命の国譲り神話から構成されています。**

<※1>嶋 恵「古代の地形から『記紀』の謎を解く」(<http://ikomashinwa.cocolog-nifty.com/ikomanoshinwa/files/07.pdf>) ご参照

<※2>村井康彦『出雲と大和—古代国家の原像をたずねて』(<http://pdf.file.cocolog-nifty.com/blog/files/16.pdf>) ご参照

「戦いを忌避する精神（なにより命を大切にし知恵により争いを解決せんとする精神）」（下に注1）は、残念ながら、「国家＝統治支配体制」の強化が始まるころ（弥生時代の終わりごろ）から否定されていきました（下に注2）。そして千数百年経て、その否定がピークに達して日本はアジア太平洋戦争に突入、自国民・他国民に未曾有の犠牲者を出しました。そして、その反省は、「戦いを忌避する精神」の否定を否定しました。それにより、「戦いを忌避する精神」が、再び日本人の精神となったのです。そして、「戦いを忌避する精神」を2度と失わないよとの誓いの文が日本国憲法です（下に注3）。

（注1）「戦いを忌避する精神」は日本独自のものではありません。他のアジアの国にも見られるものです。

ジャック・アタリ「自分をコントロールすることで他者との争いを避ける。これがアジアの文明の素晴らしさだ。」↓<下記URL>ご参照

<http://c1.cocolog-nifty.com/blog/files/08.pdf>

（注2）「国家の成立に伴い、問題の解決に暴力を用いる行動理念が社会の軸になっていった。」↓<下記URL>ご参照

<http://v1.cocolog-nifty.com/blog/files/08.pdf>

（注3）日本国憲法

「平和を愛する諸国民の公正と信義に信頼して、われらの安全と生存を保持しようと決意し」（前文）「戦争と、武力による威嚇・武力の行使は、国際紛争を解決する手段としては、永久に放棄する。戦力は保持しない。交戦権は、これを認めない」（第9条）。

<追記>

日本書紀には「天皇は饒速日命が天から降ったということは分り、いま忠誠のこころを尽くしたので、これをほめて寵愛された。これが物部氏の先祖である。」とあり、古事記には「邇藝速日命は、トミビコの妹の登美夜毘売トミヤビメと結婚して生んだ子が宇麻志麻遲命ウマシマヂノミコトで、この人は物部連ものべのむらじ・穂積臣はずみのおみ・うねめの臣おみの祖先である。」とあるが、物部（もののべ/モノノフ）はのち武士（もののふ）となり、鎌倉幕府3代執権・北条泰時するとき「革命」（「朝廷＝天皇権力」を倒す）を行ない、現在に至る象徴天皇制を創出した（注）。

（注）「日本唯一の「革命家」とは 既存権力と戦った北条泰時」（↓下記URLをクリック）をご参照

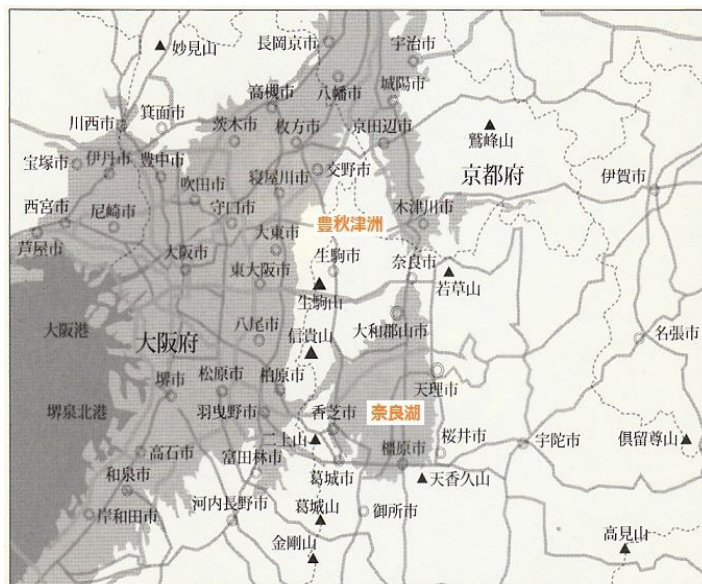
<http://fileshelf.cocolog-nifty.com/blog/files/92.pdf>

【2】長髓彦神話（長髓彦物語／長髓彦伝説／長髓彦伝承）

磐余彦尊イワレヒコノミコト（以後、磐余彦イワレヒコと記す）

が、日の出るところ（ヒムガシにある「ヒノモト＝日の本」と呼ばれる大和）に向かう出立点を意味する日向（ヒムカ）を出発し、日の本に向かう出立点たる日向は複数あり、磐余彦が出発したのはそのうちの1つとも考えられるとして東進し生駒を根元とする大和の国（生駒山・奈良湖の周辺）を奪いに来た。生駒山西麓の海岸（奈良湖からみれば北西になる）の孔舎衛くさきに上陸した磐余彦軍の侵攻を戦わずして（殺し殺されることなく）阻止したのが長髓彦ナガスネヒコである。

長髓彦軍は、生駒山の中腹に陣取り、侵攻軍めがけて雨のように矢を放った。侵攻軍を射抜くためではない。前進してくる侵攻軍の眼前に天から降ってくる矢で鉄壁の壁をつくることで、侵攻を許さない意思を突きつけ、物理的な



海面が+60m だった頃（弥生時代）の生駒山
<生駒神話の舞台>

障壁をつくるためである。

弓矢は武器（命を消すもの）ではない。人間に食べ物（命）を得させる神聖なものである（だから、現在でも日本各地で弓矢の神事が行なわれている／弓矢は古代人にとって特別の意味を持つ<<http://ikomashinwa.cocolog-nifty.com/ikomanoshinwa/2015/07/post-ad31.html>>ご参照）。弓矢は、「自然＝神」が命を得させるために人間に与えたものであり、その神意に沿って使用すれば、戦う者の（肉体ではなく）邪悪な心（他者の命を消そうとする心）を射抜くことができるので、神聖な矢が天から降ってきて**邪悪な心を射抜かれた上、眼前に障壁が出現したことで、侵攻軍は侵攻を許さない意思に畏怖を感じて立ちすくみ戦意を失い退却するほかなかった**。司令官磐余彦は退却の号令を出そうとしたが、その兄の共同司令官はそれを否定し、磐余彦の制止を振り切り邪悪な心を振り絞って再度の突撃の号令を出した。一部の兵士が矢の障壁を乗り越えて無謀な突撃を敢行せんとした。再び、長髓彦の放った矢が天から降ってきて眼前に障壁が出現した。そのとき、突撃軍を率いていた、磐余彦の兄が「自然＝神」の罰を受けて手足の一部に傷を負い、命に別状はないもののあまりの痛さに泣き叫び、ようやく戦意を喪失した。兄は、のちにこの傷がもとで亡くなるが、素直に退却するという正しい判断をしていれば命を失うこともなかったのに、**正しい判断ができず突撃の気に速はるだけの愚かさ**を、このエピソードは今に伝えている（戦前の「日本軍＝皇軍」はこの「磐余彦軍＝皇軍」にまつわるエピソードに学ばなかった）。

こうして、**長髓彦は、戦わずして（殺し殺されることなく）侵攻軍を撃退**した。それができたのはもちろん、沢山の矢をつくるなどして侵攻に備えた子どもたちを含む人々の力があつたからこそである。

しかし、磐余彦はあきらめなかった（邪悪な心を消してなかった）。生駒山を迂回し紀の川を遡って、今度は奈良湖の南東方向から大和の国に侵攻せんとした。途中、侵攻軍は各地で食糧等を強奪した。磐余彦はそれを止めることはできなかった。略奪しなければ軍を維持できないからである。自国をはなれた軍は必然的に他国の人々の命を含む大切なものを奪わざるを得ない。

侵攻軍は大和の国に侵入した。長髓彦は、生駒山麓の孔舎衛の戦い（大量の弓矢による精神的・物理的防壁の構築による侵攻軍撃退）では撃退したものの、侵攻軍を再起不能なまでに戦意を喪失させ戦力を消耗させる時間をかけることができなかったことに鑑みて、今度は「**殺戮なきゲリラ戦法**」（少量の弓矢・少人数による侵攻軍の攪乱・翻弄の繰り返しによる侵攻軍の疲弊化）で時間をかけて侵攻軍の戦意を喪失させ戦力を消耗させていった（皇軍の戦いを賛美すべき日本書紀が「皇軍は戦いを重ねたが仲々勝つことができなかった」と書かざるを得なかったことはこのことを言っている。なお、殺戮なきゲリラ戦法については「生駒の神話 立脚点」（下記URL）の「立脚点（6）」をご参照）。

<http://ikomashinwa.cocolog-nifty.com/ikomanoshinwa/2011/12/post-1e34.html>

長髓彦は奈良湖の南東部で侵攻軍と対峙し、磐余彦に通告した。「武器を収め、速やかに退却せよ」と。しかし、消耗・疲弊して最早戦う力を失いながらも磐余彦はその言葉を拒絶し、侵攻軍は進撃の体勢をとった。それを見た長髓彦は、侵攻軍がこれまで人々を狼藉し、また、戦う力を失いながらもなおも愛する祖国の安全と平和を破壊せんとしている、そのあまりに、他者や自分たちの命をないがしろにしていることに、激しい怒りを燃え上がらせた。そのとき長髓彦は奈良湖の向こう岸の生駒山上付近で何かが動く気配を感じたが、怒りに燃えて理性を失った（邪悪な心を持ってしまった）長髓彦は、その気配を打ち消して全軍に命令を発した。「敵を殲滅せよ、全軍、敵に向かって矢を放てー！」——長髓彦軍が一斉に侵攻軍に向かって矢を放とうとした瞬間。奈良湖上空を北西方向から南東方向に最速縦断して飛来した**長髓彦達の守護神たる金の鵄トビ**が、磐余彦の頭上に位置して強烈な光を発した。長髓彦軍の兵士たちの手から弓矢が離れ空中高く舞い上がって1つ残らず消えた。守護神は、弓矢（命を与えるもの）が命を奪うもの（武器）に変質させられたので、弓矢により命を与えられていた者（長髓彦達）から弓矢を奪い返したのである（弓矢が命を与えるものに復活したとき、長髓彦達の手に戻されるだろう）<**下に注**>。同時に、長髓彦やその軍の兵士たちは、一人残らず20～30mとばされ地面に叩きつけられた（打撲・捻挫・骨折・擦り傷をした者は多かったが命に別状はない／守護神は如何なる場合でも誰でも命は奪わない）。一方、磐余彦やその軍の兵士達は、金の鵄が放つ光に怯え硬直して立ちすくんでいた。

（なお、日本書紀では金の鵄は磐余彦に味方したかのように改竄がいざんされている。消耗・疲弊して最早戦う力を失いながらも戦い続けようとした磐余彦軍は金の鵄の出現によって死を免れた。その点で金の鵄は磐余彦軍をも助けたのである。し

かし、生駒の神話を学ぶ機会のなかった戦前の「日本軍＝皇軍」は、日本書紀の改竄によって金の鴉は皇軍の守護神と勘違いしていた。そして、先の大戦中、消耗・疲弊して最早戦う力を失いながらも戦い続け、金鴉勲章なるものまでつくっていたのに、皇軍を助けるため金の鴉はついに出現せず、多数の命を失うことになったのである。「磐余彦軍＝皇軍」を一方の主人公とする生駒の神話を「日本軍＝皇軍」が学んでいたらと残念である。

<注>縄文人にとって弓矢は「狩猟道具＝命をいただくためのもの」として神から賜ったものであった（「弓矢 それは古代人にとって特別の意味を持っていた。が・・・。」(下記URL) ご参照）。

<http://ikomashinwa.cocolog-nifty.com/ikomanoshinwa/2015/07/post-ad31.html>

全身の痛みをこらえながら長髓彦は金の鴉に向かって言った。「貴方様は私たちの守護神ではないか。なぜ、私たちを打ちのめす。なぜ、私たちを守らない。なぜ、敵を倒さない。」金の鴉は答えた。「いかにも我はそなた達の守護神である。守護神は、守るべき者が、命をなによりも大切にするという心を失い殺戮さつりを肯定することで墮落するとき立ち現れ、墮落することからその者を守るのである。我はそなた達が命をなによりも大切にするという心を失いかけたときは何回でも立ち現れてそなた達を打ちのめすであろう。」そう言って、守護神は飛び去った。（戮りくにははずかしめという意があり、殺戮とは、命の尊厳を踏みにじる殺し方をいう。つまり、「食べるため以外のために殺す」ことをいう。）

やがて、少し痛みから解放された長髓彦はよろよろと、激しい怯えからその場に座り込んでいた磐余彦のもとに歩み寄り、彼の手をとった。そして両者は和平交渉に入るようになった。

だれでも、命をなによりも大切にするという心を失うことはあるだろう。しかし、それにより殺戮を実行せんとした瞬間にその者が指導者であった場合は、その資格を失う。指導者とは、人々が誤った方向に進まないよう正しい方向を指し示す者のことである。長髓彦は指導者の資格を失った。殺戮をたった1回でも実行せんとしたものは指導者の資格を失う。命をなによりも大切にするという心はそれほど尊いものなのだ。長髓彦は祖国を去る決意をし、かねてから親交（まさに侵攻と正反対の言葉である）があり義兄弟の契りを結んでいた安日彦アヒビコの故国に去った（日本書紀では長髓彦は亡き者にされた、と改竄されている）。妹の三炊屋媛ミカシキヤヒメ、その夫の饒速日命、これら二人の子で長髓彦の甥にあたる可美真手命ウマシマデノミコトをはじめ大和の国の人々に見送られて。

長髓彦の移住と共に、大和の国の呼称であったヒノモト（日の本）や日高見ひたかみ（日が高々と見える良い国）も安日彦の故国（現在の東北）に運ばれ、やがてそこで住む人々は、自分たちの住む地域をヒノモト・日高見と呼ぶようになった<注>。

<注>大祓詞おおはらえのことば (<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%A4%A7%E7%A5%93%E8%A9%9E>) では、大和の国を「大倭日高見国おおやまとひたかみのくに」と呼んでいる。また、古代における日本の東北地方の知られざる歴史が書かれているとされている、古史古伝『東日流外三郡誌つがるそとさんぐんし』(<http://mario.gnk.cc/tsugaru/sangunshi7.htm>) の、「東日流」とは「日の本が東に流れた」という意である。

祖国を離れるに際して長髓彦は、共同指導者であった義弟の饒速日命にあとを託した。二人は、**国を奪う奪われるという難問を戦い（殺し殺される）という手法でなく知恵を働かせて解決する**、との約束を固く交わした。そして、饒速日命は長髓彦との約束をしっかりと果たすことになる。長髓彦と饒速日命との約束の物語が「饒速日命の国譲り神話」である。

なお、指導者の資格を失った長髓彦を祀る神社は少なかった。その神社も、明治に入って「逆賊」を祭神にしているのは許されなくなった。そのため、今日でも公然と長髓彦を祀る神社はない（長髓彦を別名にして祀っている神社はある。また、古史古伝「先代旧事本紀大成経」は陸奥国一之宮鹽竈しおがま神社の鹽竈大神をナガスネヒコであるとしている）。しかし、「先祖が長髓彦に従って戦ったという伝承を信じ、それを誇りにしている人たちが現代もいる」（村井康彦「出雲と大和」→右URL）のである。 <http://pdffile.cocolog-nifty.com/blog/files/16.pdf>

<ご参照>ナガスネヒコの守り神「金の鴉」はなぜナガスネヒコが戦うのを止めたのか？ (下記URL)

<http://ikomashinwa.cocolog-nifty.com/ikomanoshinwa/2015/07/post-06e8.html>

<ご参考>**生駒の神話と現在** (下記 URL)

<http://v1.cocolog-nifty.com/blog/files/2.pdf>

～この文書「生駒の神話（国譲り神話と長髓彦神話）＜大要＞」は、「**生駒の神話**」(下記 URL) に掲載されているものです。～

<http://ikomashinwa.cocolog-nifty.com/ikomanoshinwa/>